

説教 『信仰のありどころ』山本 護 牧師

聖書 エゼキエル書 18:30～32 / ガラテヤの信徒への手紙 3:11～14

神の言葉を預言者は語る。「お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ(エゼキエル 18:31)」。その直前には「罪がお前たちをつまづかないようにせよ(18:30)」とある。「罪」とは何か。罪とは神に「背く(18:31)」こと。律法という善悪の基準があり、民は「背かない」生き方を知っているはず。それをふまえて神は「ひとりひとりをその道に従って裁く(18:30)」。ささやかな善も、ちょっとした悪も、一人ひとりの隅々まで数えられている。「天網恢恢疎にして漏らさず」というわけだ。だからといって、「裁き」とは、善と悪を相殺したり、量刑を決めたりすることではない。

「裁き」とは何か。裁きの根本は「あらゆる罪を投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ(18:31)」という励ましではないか。「わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ(18:32)」という罪人を見捨てない愛ではないのか。「悔い改めて～立ち帰れ(18:30)」という御言葉を、私たちは幾度となく聞いて来た。しかしながら、たとえ悔い改めたとしても私の従順などたかが知れている。とてもじゃないが「立ち帰る」ことや、「新しい心と新しい霊を造り出す」に見合うほどの悔い改めではありえない。そんなことは重々承知で、神は「立ち帰って、生きよ(18:32)」と私を迎えて下さる。

教会では「律法ではなく信仰だ」と、くり返し語られる(ガラテヤ 3:11)。パウロにはそこまでの信仰があるだろう。また歴史の中にも凄い信仰者が数多輩出している。彼ら偉人たちの信仰と、私の信仰を並べてしまっているのだろうか。彼らはあまりに立派過ぎて手本にはならないし、蹉跌も適度に許容される標準的な信仰生活でさえ、応えていくに私では不十分な気がする。それなのに「わたしたちが、約束された“霊”を信仰によって受けるためだった(3:14)」と、厚かましく「私のこと」にしちゃっているのだろうか。「霊」を受けるにふさわしい信仰という器が、はたして私にあるのだろうか。

この自問の答えは「厚かましくていい、器はある」だ。私の信仰は頼りなく、しかも一定ではないから、薄くなることも、気分次第でやや厚くなることもある。そんなことは誰だってそうだ。それが何であろう。信仰は、努力で獲得したり、自然と身につくようなものではない。「約束された“霊”」を受ける信仰とは、私たちの内におられるキリストの信仰のこと。「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださった(3:13)」つまり、あらゆる律法の呪い(信仰規範)、または敬虔な信仰生活という強迫観念は、十字架で贖われている。買い取り手であるイエス・キリストの信仰が、私たちの内側で「私の」信仰として、「約束された“霊”」を受ける。

「私の」内に生じるキリストの信仰の前では、自惚れ卑下する自意識過剰な「私の」信仰など木端微塵だ。パウロはどんな苦難に遭ってもどことなく明るい。この明るさは、パウロの内にあるキリストの信仰からの風(霊)。預言者は「お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ(エゼキエル 18:31)」と告げる。背きの償いを気にせず、新たな心と霊へ進め、と。私たちはキリストの信仰を自らに迎え、新たな霊を受け、神の民としての道を歩み始めている(ガラテヤ 3:14)。



#### 【おまけのひとこと】

信仰を持っている という言い方がある 厳密にこれを語れば 信仰に持たれている となるか  
内側から起こることだから 傍から見れば持っている となる とはいえ持っていないこともない